

シュメール・バビロニアにおける宗教的賣淫の慣習について

——アジア的共同體と古典古代的共同體との間——

一 柳 俊 夫

「何人も、賣春をし、又はその相手方となつてはならぬ。賣春防止法第三條」

「その國の女は一人のこらず一生に一度は必ずアフロディテの境内に坐して見知らぬ男と情を交わさなければならぬという慣習があつた。……⁽¹⁾」確かに、歴史家としてはトゥキユデイスのような嚴正さには缺けているけれど、古代きつての記者といえるヘロドトスの達者な筆の故に古代バビロニアの《宗教的賣淫制》⁽²⁾ (*tepodonhos*) は一般にも一應はよく知られている。

(1) Hdt. I. 199.

(2) ストラボ(紀元前一世紀頃のギリシヤの地理學者、歴史家)もこの慣習を傳えているが (Strabo, XVI. 120) <ロドニアス受賣り>と云われている (G. Maspero, The Down of Civilization, Egypt and Chadia, 1910, p.640. N.I.; E. Westermarck, The History of Human Marriage, 1921, p.207)。

更に近代、プリフォルトが苦勞して調査し、蒐集して呉れた世界各地のこれと同様の、または類似する慣習に關す

シュメール・バビロニアにおける宗教的賣淫の慣習について

(1) 豊富な資料によつてこの「ヘロドトスの記事はいよいよ虚構^{フィクション}ではなさそうであり、そしてこの慣習がアジア的社會、または古代東方社會の構造と深い關係がありそうだという推量に古代史への關心を少しでも持つている人は容易に到達できるであらう。ところで、この社會、または地方の重要な共通特色はマルクスの「資本制生産に先行する諸形態」が疑いもなく最も簡潔に要約しているように灌漑組織と、その上に形成された農業經濟、總體的奴隸制(Allgem.-eine Sklaverei)および專制主義^{デステイニスム}であるとしても、バビロニアの華やかさを生んだメソポタミアと相隣關係の、それとならぶ古代東方地方の先進地域であつたエジプトではバビロニアのような宗教的賣淫の慣習については、アルメニアもそうであつたが、ストラボが一部の貴族の女達だけがそれを行う權能、資格があつたと傳えているだけである。(2) 尤もプレステッドがいみじくも名づけた「肥沃な三日月地帯」(The Fertile Crescent)の兩端の立役者であるメソポタミアとエジプトのコントラストな相異は色々と知られている。例えば家族の歴史についていえば前者では男が女より、父が母より、そして夫が妻より重要視され、また前者は古くから家父長制の國、(4) 後者は母權制の長く存続した國であつたというような理解はもう常識的な事柄となつてゐる。しかし、そんなつた原因―社會經濟的土臺の究明については、その割合に殆んど歴史科學のメスが入れられてゐない。

(1) R. Briffaut, *The Mothers*, 1927, vol.III, pp.210 sq. 次いで反母權制説の代表、ウェスターマークの「婚姻史」にとにかゝる澤山蒐集やつて5頁(op. cit. pp.207 sq.)。

(2) XI. 14. 16, XVII.1.6. 他地方でもこのように一部の特權階級の女、女司祭、巫女の間にはこの習慣は見當らなう。また、ヘロドトスはエジプト人は神殿で性交せず、性交後も沐浴しなければそこへ足を入れなかつたと傳えている(II.64)。

(3) J.H. Breasted, *Ancient Times, A History of the Early World*, 2ed. p.136. N.I.

(4) H.R. Hall, *The Ancient History of the Near East*, 1924, pp.47, 205 sq; Briffaut, op. cit. vol.II. p.252.

(5) Maspero, op. cit. p.733, N.3, 戒能通孝「社會生活と家族法」1130頁。

ナイルもチグリス・ユーフラテスも定期的氾濫によつて周邊の平野に農業發達の沃土を形成させ、そして、それが氏族に基礎を置く村落共同體の統合、更に灌漑・治水組織の管理を経て專制政府形成への經濟的契機となつた點ではおなじであつたが、後者はノアの洪水に反映するような定期的氾濫、洪水に猛烈さと不定期性が屢々あり、洪水期間もナイルの四十日間よりずつと長期の二十一週間であつたので人々は、エジプト人は如何にうまく灌漑するかということを考えるのに對しメソポタミアでは防水工事の方に大童であつた。(1)それにメソポタミアには、周圍との閉鎖の困難(エジプトでは廣大な砂漠によりそれが可能であつたのでヒクソス人が後代に攻めて來るまで外寇を免れた)、自給自足經濟の至難(ナイフを作るヒウチ石さえ輸入に依存した)、および氣候の不均等(北部では霜が降りた)というような自然的條件が加わり、初めから統一王制への道は險しく、そして手間がかかつた。メネス王によつて一千年も早く統一王制に到達したエジプトの方が武斷的であり、原始共同體社會から遠ざかつているように見えるけれど逆である。エジプトの王はフレイザーのいう呪術師から發達したシャーマンの王の典型であり、いわば自然的に形成されたアジア的專制君主と相對的にいえるものであつた。(2)それを可能にした農業經濟の高い安定の土臺上で王は剩餘勞働力をピラミッド造營に搾取できたけれど、他方、王はどこまでもシャーマンであることを實質的に要求され、一本のナイルにそつてならんだ村々、そして、やはり灌漑の組織化の必要上できたその政治的統一體であつた地方共同體《ノモス》の意向を無視したこのような非生産的暴制は當該王朝を長續きさせなかつた。(3)尤も逆に見ればこのように

一つに統合し易い共同體機構の故にマックス・ウェーバーが特にモデル國とすることができたような家産制官僚國家の成立が、古代人がそれより他の世界を知らなかつた《氏族》共同體組織を最もうまく利用した搾取形態として可能であつた。一方、おなじ典型的な東洋的水利社會とされているけれど南部メソポタミアでは始めから村落、地方共同體の合併、統一が地理的にも至難であつた。エジプトのノモスも初期では水利をめぐつて相互に抗争したけれどメソポタミアではそれが日常的であり、且つ後代まで宿命的に續く《ギリシャのポリスに類似する都市の群立、對立》。王は軍事的實力を強く要求され、シャーマンの性格は形式的な面に僅かに残つてゐるだけである。また人民はこゝでも「なかば現實の專制君主でありなかば假想上の種族的本體」である支配者により王墓、神殿の建築に剩餘勞働力を搾取されるけれど更に捕虜奴隸、債務奴隸へ轉落の危險に絶えずおびやかされエジプトより苛酷な搾取形態下に置かれる。他方、この共同體の苦惱、矛盾の間隙から古典古代的社會の現象に類似するもの《土地私有、私的經濟の發達、ハンムラビ法のような私法、商品奴隸等々》が顯著にその對策、または利用として外形に現われてエジプトより前進したように見える。バビロニアの人口に膾炙する宗教的賣淫の慣習もアジア的共同體としては異常な膨脹、畸形的成長とも思われるこれらの共同體の震動、異常現象と正に關係があつた。

- (1) Maspero, op. cit. p.550. 戒能、前掲書、一四三頁。
- (2) ゴールドン・チャイルド「アジアの古代文明」ねず・まさし譯、一二九頁以下。
- (3) マルクス「資本論」第一部第三分冊(3)長谷部文雄譯、青木文庫版、三〇九頁。
- (4) cf. Hdt. II. 158. ア・イ・テュメネフ「古代東方と古典古代」香山陽坪譯編「奴隸制社會の諸問題」二九六頁註(3)。
- (5) 「家産制と封建制」濱島朗譯、一七、七九頁以下。

(6) マルクス「資本制生産に先行する諸形態」飯田貫一譯、九頁。

農業事情から少し吟味してみよう。バビロニアの宗教的賣淫の慣習が群婚、または母權制から單婚への一過程であるという圖式はエンゲルスが示したが、エジプトの農民生活は有名なサリエ・パプルスの一節を想起するまでもなく内部では階級的に悲慘であつたけれど古代東方では最も安定しており、この農業の高度な安定が種族共同體の存續、また母權制の溫存に強い作用を及ぼした。⁽⁴⁾

(1) 「家族・私有財産及び國家の起渡」西雅雄譯、岩波文庫版、六六―八頁、八六頁。戒能教授はエンゲルスの把握は誤りであり、それは宗教的奴隸制の一表現（中世領主、僧侶の初夜權もおなじく農奴制の一濫用形態）に過ぎず母權制とは無關係といわれる（前掲書、一一、三七頁）。しかし、エンゲルスを積極的に解すれば、彼はそれを群婚、母權制の單なる名残りといっていないように思われる、結論はウェスターマークとおなじになっているが、多分、同教授は奴隸制に重點を置かれたのでエンゲルスの大難把な把握に不満を抱かれたのであろう。ちなみに別個所では母權制から單婚への一過程としてそれを認めて居られる（二五七頁註3）。エンゲルスより深い觀察はフレイザーに見出される。彼によれば（それは女司祭の場合も）當初は淫蕩な風習でなく、土地の豐饒、人間、動物の繁榮、増殖の祈願のための母權制農業社會の共同體全員による聖儀、あるいは女尊長の母的宗教（原始農業社會に必然に生じた）による宗教的權能の名残りであるという（J.G. Frazer, *The Golden Bough*, 1914. IV. Adonis Artis Osiris, vol. I. pp. 36, 71sq.）。彼の所説は起源論に止まつてゐるがモルガン・エンゲルス派の母權制説の有力な同志に加えられる得ぬ（Totemism and Exogamy, 1910, vol. III. pp. 103sq. における族外婚理論に注意）。ウェスターマークも彼を主としてライバル視してゐるが、彼の所説は積極的理由がないから宗教的賣淫の慣習は群婚の遺風でないというに過ぎない（op. cit. pp. 207sq. 166sq.―初夜權の場合）。またマックス・ウェーバーはフレイザーとおなじく豐年祈願と關連させてゐるが本物の賣淫（單婚や私有財産の發生とは無關係な）としてそれを眺め、バビロニア人の頽廢的性質、墮落の反映としてゐる（「一般社會經濟史要論」黒正巖・青山秀夫共譯、上卷一〇二頁）。ともあれウェスターマークやウェーバーのよう

な近代のヘテリスムスとの混同の上に立つ見解(反母權制説)はまだ支配的のようである。

(2) Sallier Papyrus, I, pl. vol. II 2-8; Maspero, op. cit. p. 311.

(3) 彼らは道具も肥料も餘り氣にせず收穫を保證された(Maspero, op. cit. p. 66; 戒能、前掲書、八一頁)、農業に人手を要するの是一年に數週間に過ぎなかつた(G. Lambroso, Sur l'économie politique de l'Égypte sous les Lagides, 1870, pp. 97sq.) 等々。

(4) 日本における農業と母權制との相關性は洞富雄「日本母權制社會の成立」二九一頁以下。

(1) (ロドトスやテオフラスト(300B.C.頃のギリシヤの植物學者)がバビロニアのすばらしい肥沃と收穫を傳えているけれど南部メソポ

タミアの農業定住には舊約創世記の天地創造に反映する手間のかかる排水工事、他共同體との不斷の抗争というような條件が作用し、それは相殺された。アル・ウバイト期《原シュメール人による最初の定住》の數百年の間に村落は次々に改築された舊村落、また洪水の堆積物の上に約五十フィート高く上つたがその間に原始農業における女の指導的役割に男の社會的力が大きく割込み、そして母權制もエジプトのような存續の可能性を打切られて仕舞つたようである。そして組織的な軍隊をもつた本物のシュメール人の支配下のウルク期がこれに拍車をかけたらしい。創世神話のマルドウク神のチアマート《惡龍—女神》退治が兩シュメール人の鬭争の、また母權制と父權制との抗争の反映かどうかはギリシヤのように明瞭に斷定できない。また考古學のシャベルは目下アル・ウバイト期以前の段階を掘り出してきているがエジプトのような母權制の痕跡は豊富に、または決定的なものとして發見できないであらう。(4)

(1) Hdt. 193. Theophrast, Historia plantarum, 87; Strabo, XVI, I.14. 小麥などもメソポタミアからエジプトへ傳つたそうである(Maspero, op. cit. p. 66, 555, N.I.; cf. チャイルド、前掲譯、六八頁)。

(2) チャイルド、前掲譯、一三七頁、cf. Hdt. I.193.

(3) 松村武雄「希臘神話の新檢討」五九、三七五頁以下。なお、ギルガメシュ神話においてギルガメシュがイシュタール女神の求婚を拒否している點を母權制から父權制へ反映と見る説―井上好郎「バビロン法の神婦と其社會的起源」法學研究、一七卷三號、一九〇頁。

(4) チャイルドはアル・ウバイト期の女人形が豐饒祈願、母權の反映かどうか不確かであると述べる（前掲譯、一四三、八頁）。

なお、兩シュメール人は起源はおなじで移住の時期が違つていたといわれている（レナード・ウーリイ「考古學より觀たるアジア」赤木俊譯、一七一頁註3）。なお、後代に至つてもメソポタミアでは共同體間の抗争が不斷に行われるけれど被征服者は捕虜として殺される他、征服者の共同體に吸收され（總體的奴隸制に包含、あるいは貢納的義務を負わされて「マルクス」「經濟學批判序說」大月書店版選集、補卷3二七頁、早川二郎「古代社會史」一七二頁以下參照）スバルタのポリス（被征服種族に農耕させ、征服者はポリス内で公共生活、防衛に専心して、且つ前者を監督、搾取する）を形成しない。現地民（勝つた共同體の人民）から見れば捕虜と現地民が一つの大衆に寛大に融合され、後に兩者の區別のつかない程現地民が搾取される（總體的奴隸制の擴大）。―古典古代との相違點としてテュメネフが力點を置く（前掲論文、二七四、八頁）。

メソポタミアにおける母權制の朝燒けのような薄命の後には經濟的支配者から一夫多婦制の見本が作られて行つた。ラガシ古王朝のウル・ニナ王の記錄に見える「配偶者の家」(e-dam)、同新王朝のゲデア王のそれに現われている「女の家」(e-sa)―主神ニンギルスの妻に⁽¹⁾されてゐるバウ女神、イシュタール女神の神殿の女司祭の家―はプナリアの家族の推定資料になるかも知れないが現實には神の現世における代理人である王や神官らのハレムに他ならず、そしてこの偽瞞はウルク期には公然化したらしい。イシュタール女神（バビロニア人がアフロディテ女神を呼ぶ名）。

ミウリッタ女神とも呼ぶ)の先身アスタルテ女神《大地母神》をもつセム人も元は母權制をロバートソン・スミスの強調するように持つていたかも知れないが南部メソポタミアの「エデンの地」(エジプトより水利も悪いとはいえず周邊の砂漠、山嶽地より見れば農業、漁業に好適の地であつた)の支配のためにはそれを犠牲にしなければならなかつた《ジェムデット・ナズル期》。それでも最初の、灌漑組織の維持、管理の上に立つ共同體的所有が生産力の増加、階級の發生によつて破られて現われた、國家的所有、經濟として知られる神殿經濟の指導者が軍事的實力者でなく神官《sagan》であつたのは共同體の創造者、守護神と見做される神の現世の代理者たる彼らが共同體の剩餘生産物の保管、分配に最も公正なる者であるという信頼の故であつたが、それは問もなく裏切られ、そして、その搾取經濟内に最初に集團的に引き込まれたのは女達であつた。⁽⁵⁾ 奴隸を意味する最初の明確な語は女奴隸《*gi.ri*》(山から、異國から來た女)であり、どの時代の經濟文書によつても男の奴隸より壓倒的に多い。この餘波が疑いもなく共同體の女達を宗教的賣淫に追いやつた根源であつた。神殿經濟の指導者—支配者の神官から軍事的實力者への移行(パテシ《*Patesi*》からルガル《*Lugal*》へ)、更にサルゴン王に始まる統一王制への移行の過程《地方支配者—エンシ經濟、王室經濟》において中央集權的專制政府、國家的經濟は強化され周邊の村落に残つてゐる共同體員をその搾取形態の中に引き入れて行つたが、その過程を最近異色的に追跡して行つたテュメネフによればどの時代でも男子奴隸に関する資料の僅少なのは偶然でなく、彼ら、殊に女奴隸から生れて成長した少年は搾取によつて眞の奴隸狀態に置かれていた共同體員の中に融け込んでゐるという狀況だけによつて説明される。⁽⁶⁾ この特別扱いの家父長制的制約下では共同體の女子《*gi.ri*》と女奴隸との差異は神殿直屬の女捕虜收容所の有無の點だけらしい。經濟的支配層である神官、王、およびエンシ經濟下

の役人らにとつては直接搾取經濟（共同體的運營とはいえず、その濫用である強制労働組織）内においては兩者共おなじ性的道具でもあつた。ウルカギナ王の有名な改革は「ラガシュの人が利子をとるようなことを止めさせ、悲惨な生活を救い、盗みや殺人を家から放逐し、孤兒、寡婦に對して強者が暴力を振わないように」⁽⁷⁾ 共同體の土地を勝手に都合のよいように分配し、農民その他の生産者（共同體員）から剩餘生産物として收穫を神殿に貯藏させる以外に高利と税を取立て、彼らを搾取、債務奴隸化させて神官、役人らによつて荒廢化した共同體秩序の回復を計つたものであつたが、それは性的頽廢にも乗り出した。ただし次のような規定によつてである――「これまで女は二人の男に所有されていたが、今後はそういう女は水の中に投げ込むことにする」⁽⁸⁾。一夫多婦制を一婦多夫制に責任轉嫁する一方的處置は女が對等な資格で男性的支配をとにかく索制できたエジプトと對照的であるが、この不公平な相異は直接的搾取形態《總體的奴隸制》の苛酷さのそれに基づく。その故にメソポタミアではエジプトのような豊富な戀愛詩は見當らない。⁽⁹⁾そして、王室經濟下で一夫多婦制は法律的に確立された。この時代の經濟的土臺はウル第三王朝の粘土板が語つてくれるように直接搾取形態は苛酷の絶頂に達し、階級不平等（完全に現物給與を受け、共同體の《剩餘》生産物によつて養われる王室、それを取まく支配層と農業、灌漑などの從來からの共同的義務の他に全ゆる労働―舟荷の積み下し、曳舟などの重労働があつた―に搾取される眞の奴隸狀態に落ちた共同體員）が深刻化した。このような苛酷で、かつての共同體的機構になかつた諸矛盾の多いメソポタミアの總體的奴隸制下ではエジプトのように古王朝における母權制の反映である貪相な夫のラー・ヘテップに對してはるかに氣品あるネファート女王の像のようなものも見當らないし、⁽¹¹⁾ 王家に顯著な母權制の名残である兄弟姉妹婚⁽¹²⁾も、ピートリーがいうようにそれは母權的所有權と父權

的相續權とを和解せしめるものであつたにせよ、このケースさえもバビロニアでは稀薄である。サルゴン王は母系による王位の正當性を勅令で宣言しているけれど父權制の合法化のための政治的意圖がはるかに濃厚であつた。⁽¹⁴⁾

(1) 井上、前掲論文、一八一頁。

(2) R. Smith *The Religion of the Semites*, 1888-9, pp.56 sq.

(3) チャイルドがよく描寫してゐる(前掲譯、一四七頁以下、同「文明の起源」ねず・まさし譯、下、六四頁以下)。

(4) 例えば、利子の始まりーチャイルド、前掲譯、下、七九頁以下。神殿經濟自體が家父長的となる。この原始的搾取形態は王室經濟に消滅し、新しい搾取形態、中央集權に代わる(テュメネフ「古代シュメールの國家經濟」前掲譯、三七頁)。

(5) 捕虜奴隸引入れの可能性は生産物の充分な貯藏＝神殿經濟の可能(マルクス「經濟學批判序說」前掲譯、二七四頁注意)と共にその共同體内部に奴隸制、またはそれに近いものが發生していることを要する(渡邊義通「日本古代社會の世界史的系列ーアジアの生産様引論争」三島・石母田・藤間共編「日本古代社會」II、五五頁參照)。男子捕虜は共同體に吸収するより殺す方が當初多かつたのは(井上、「シュメールに於ける奴隸成立期の研究」(一)、社會經濟史學、三卷一號、三八、四九頁)その共同體の生産力、國家組織と釣合わないか、危険であつたからである(イ・エム・ディヤコノフ「アッシリアおよびウラルトゥにおける捕虜の運命の問題によせて」香山譯編、前掲書、四四頁)。購入奴隸が増えるバビロン王朝に至つてもこの原則は變らない(總體的奴隸制の維持、古典古代的奴隸制への不到達)。男奴隸を意味するシュメール語の「イル」「ル」「カル」は當初は一般人、監督者(カール)を意味し、奴隸としての用法は内部的奴隸＝債務奴隸としてであつたのは(井上、前掲論文、(三)、社會經濟史學三卷二號、三三頁、(一)、二卷十二號、八頁、(二)、五八頁、四三頁)意義が深い。

(6) 「古代シュメールの國家經濟」香山譯編、前掲書二九頁。

(7) Col. XII. 139sq.

(8) 戒能、前掲書、九二頁以下。ウルカギナ王の始めて使用したルガルは軍事的權能に基くものであり、氏族共同體の傳統を絶つ強力支配であつた。ちなみにパテシはマスペロによれば元はエジプトにおける共通の祖(pāt)から派成した家族(pātū)

の族長 (ropātū—諸家族の族長は ropātū-hā) と同一のものであった (Maspero, op. cit. p.70-71, p.604, N.4)。

なおルガル、パテシ、およびエンシは始源において女性支配の事例がある (井上好郎「シュメル・バビロ社会史」一四三頁以下参照)。

(9) Maspero, New Light on Ancient Egypt, 1908, p.160.

(10) 井上『前掲論文』Ⅲ。

(11) Maspero, The Dawn of Civilization, p.362.

(12) Maspero, op. cit. p.50, N.6, p.270, N.5; Briffault, op. cit. pp.37 sq.

(13) Petrei, Social Life in Ancient Egypt, 1923, p.110. シェー・トムソン「ギリシャ古代社会研究—先史時代のエーゲ海」池田薫譯、上巻一五一頁。

(14) Maspero, op. cit. p.597; 戒能『前掲書』一四〇頁。なお、ある泥文書によればラガシユ古王朝ではルガランダとバラナムタルラ王妃、ウルカギナ王とシャクシヤグ王妃の共同統治が見られ、署名も王妃によつて行われている。ラングドンやトムソンは王『パテシ』が「つれあい」(consort) にすぎず、眞の權威が妻の方にあつたことを暗示する母權制の遺風と積極的に解する(トムソン、前掲書、一五二頁、cf. テュメネフ、前掲書二三頁)。他方、フレザーによれば、王權は母權制農業社會の農業呪術に由來し、政治的權能は第二義的なものであつた。すなわち、王は一定期間をすぎると作物が毎年死してまた甦ることの擬人化として(穀物王)新しき年の豐饒祈願のために殺された(The Golden Bough, IV. Adonis Attis Osiris, vol.II, pp.96 sq.)。この意義はエジプトの王よりシャーマ的な性格の稀薄に思われるバビロニアの軍人王にも残つてゐる。—王權は現實には生涯續いたが、理論的には一年とされ、王は毎年の新年祭にバビロンのマルドゥク神殿に参拜し、王權を毎年合法化する必要があつた。また初期では、こゝでも王は一年をすぎると退位せしめられ、殺されることもあつたらしい。バビロンの司祭ベロソスによればバビロンにサカエアという因人が五日間王座につかせられて後殺される行事があつたが、これは後代におけるその代替であつたとフレIZERは述べる(The Golden Bough, III. The Dying God, pp.113 sq.)。他の同様は資料にはウーリー「ウル」瀬田貞二・大塚勇三共譯、六〇頁以下(初期ウル王期時代の生贄、王のしばしの代理者の墓)、ガスタ

シュメール・バビロニアにおける宗教的實淫の慣習についで

「世界最古の物語」矢島文夫譯、三〇三頁以下（カナアンの「バアルの物語」解説）。

メソポタミアにおける混亂、矛盾が母權制を父權制へと急移行させたことは宗教にもよく反映している。シュメール人の神殿は原シュメール人の村落の中心の丘、避難所と重るものであつたけれど、⁽¹⁾その聖塔はできるだけ高く作られた。神がこの塔の階段を降りて來るといふ信仰はシュメール人が山嶽地から持ち込んだ。⁽²⁾その神々はそこで慘々蒙つた嵐、雨——自然現象の權化であつたが三角州に侵入してからこの神々は原シュメール人の大地母神、農業神を放逐、またはその權能を吸収した。例えば、ニップールの主神エンリルは元來暴風雨の神であつたが、三角州へ來てこの惡魔神は農業神も兼ねる。最高神アヌ（天空の支配者）は性別不明の普遍的存在であつたが三角州で明確に男神となり、その妻アントゥムが分化され、エンリル神がその子とされた。⁽⁴⁾共同體間の不斷の抗争も神々の地位交替となつて現われた。例えば、ニップールのエンリルがシュメール人によつて三角州へ持ち込まれる前にはここで神（太陽神兼農業神、既に母權農業神を吸収している）⁽⁵⁾があり、ラガシュの主神ニンギルスはキシュのザマ神に主座を奪われている。そして、兩方共エンリルの子と稱した。⁽⁶⁾セム人の支配により神々の系譜は新しい神々を加えて混雜する。ハンムラビ法典を授けたことにもなつているシャマシュ神はサルゴン王がアッカド族を連れて侵入する前にはシュメール人には未知の他國の神であつた。⁽⁷⁾六萬五千に及ぶという神々の調査はここではできないけれどこの神々の系譜を作つたバビロン王朝の神官達が敢えて整理を行わなかつたのはシュメール人もセム人も共同體機構において基本的小なじであつたからである。中世ヨーロッパにおけるラテン語のようにシュメール語が宗教用語としてセム人の支配下にも殘されたこともその一環であつたが、支配者にとつては前共同體の象徴を利用することが支配上都合がよかつたし、ま

た灌漑組織の上に立つ古代東方社會では必然の成行きでもあつた。エンリルに代るバビロンの最高神マルドゥクもあ(9)
る祈願文ではアヌ、エンリルと共にシュメールの最高神を形成するエア(水神)の長子といふことになつて(10)いる。他
方、疑いもなくこの神々の園の混雜はメソポタミアの共同體の混亂、不安定の反映であり、アッシュール・パニバル
王が宗教改革に乗出したけれど經濟的土臺と沒交渉な神官達の頭の中だけで試みたゞけなので無駄であつた。一方、
この系譜では女神は始めからそうであつたかのように男神の妻、妾にされて(12)いる。エンリルの妻ニンリル(天地の女
王、神々の母)に限らずバビロニアの女神は夫神によつて存在が認められた。が、イシュタル女神は愛慾の女神と
して金星に擬制され、定まつた夫神もない。この女神の性格は妖婦的、狂暴(13)な女として一般に知られているが軍神
としてはずつと後代まで尊敬されて(14)いる。この權能は原始農業社會で大地母神が農業神の權能と共に兼備していたも
のである。もし、メソポタミアがエジプトのように相對的に安定した農業經濟を保持し、軍事的緊張が少なくて濟ん
だならばイシス女神とおなじく農民の尊敬の中に、こ(15)うも娼婦化されずに濟んだのに相違ない。

(1) C.H.W. Johns, *Babylonian and Assyrian Law*, 1904, p.185; 中原與茂九郎「西南亞細亞の文化」岩波講座、東洋思潮Ⅳ
東洋思潮の展開(三)二二頁、チャイルド、「アジアの古代文明」前掲譯一四八頁。

(2) チャイルド、同前、二六頁、ウーリイ「考古學より觀たるアジア」前掲譯、一九九頁。

(3) M. Jastrow, *The Religion of Babylonia and Assyria*, 1898, p.53.

(4) Frazer, *The Worship of Nature*, 1926, vol.1, p.70; cf. H.V Hilprecht, *Cun. Texts* (Univ. Pennsylv[ania]) 1911, pp.4
sq.

(5) 小栗襄三「アッシリア學概説」二五〇頁。たゞし、同書はアニミズムとして觀察してゐる。

- (6) エンリルはまたラガシュとウンマの共通の神として兩國を仲裁する (Frazer, op. cit. pp.348 sq.)°
- (7) 太陽神はシュメール人もてゐた (Frazer, op. cit. p.529)°
- (8) Sayce, The Religion of Ancient Babylonians. 1902, p.216; 戒能、前掲書、一五七頁°
- (9) Frazer, op. cit. p.352.
- (10) 小栗、前掲書、二五八頁°
- (11) トムソン、前掲譯、三三頁°
- (12) Frazer, op. cit. p.348. アヌの妻アントウムはアグムカリム王以後使用されず (Ibid., p.70)°
- (13) ハンムラビ法後文でも軍神として名を列ねられてゐる° Ward, Seal Cylinder of Western Asia. 1910, Chap. 25.
- (14) 松村武雄「希臘神話の新檢討」一二二頁以下參照°
- (15) イシスがエジプト人によつて天狼星に擬せられたのはナイルの増水の始まる夏至の頃、東天に、日の出前一際美しく輝くからである(農業行事の始まり)。彼らにとつてはナイルの洪水は彼女の夫オシリスへの追慕の涙が落ちて溢れたものとも信ぜられた。エジプトの農業生活はイシスエの祭禮を以て毎年始まり、收穫に當つては最初の一束を女神に捧げる。(Frazer The Golden Bough. IV. vol.II pp.34 sq.)° この祭禮のメランコリーな性質はおとなく生ざれば來世で報ゝられると云うエジプト的總體的奴隸制のイデオロギーの反映でもあつたが、それでもイシスは農業と現實に結合している。フレイザーはイシスに更にマリアへとおなじ信仰の念を見出す (Ibid., pp.118 sq.)°

全歴史を通じてエジプトでは捕虜奴隸も債務奴隸も壓制的に少なかつたので共同體機構は餘り歪曲されず保持され、母權制もとにかく残つた。バビロニアでも捕虜奴隸(殊に男子奴隸)はデュメネフが特に強調しているように過大評價は禁物である。古典古代的社會と異なる灌漑組織の上に形成されたアジア的社會としてエジプトほど寛大ではなかつたけれど、こゝでも「捕虜奴隸と王室經濟、神殿經濟で搾取されている現地住民の生産者との間に區別が排除したこ

と、兩者が一つの大衆に融合してしまふ傾向が存在した⁽³⁾。だが、この融合した共同體の人民が現地民、捕虜のいずれにかかりなく眞の奴隸、債務奴隸に轉落する危険は現實にメソポタミアが大きかつた⁽⁴⁾。

(1) 戒能、前掲書、一二六頁以下。テュメネフも引用するウェスターマンの資料によれば紀元二世紀頃でも奴隸数は全住民の六―七パーセントを越えず、一・五パーセントの場合もあつた(「ヘレニズム時代およびローマ時代における河川文化諸國(メソポタミアおよびエジプト)」香山譯編、前掲書三二頁、註60)。

(2) 例えば「古代東方と古典古代」前掲譯、二七九頁。

(3) 更につゞけて述べる「古典文化諸國と異り、そこでは『自由民』と奴隸との結婚が許されたばかりでなく、このような結婚における夫婦の相互關係(特に母方の關係)が法律によつて規定された。シュメールおよびバビロニアでは、年老いた『兩親』を養う義務で奴隸を養子にすることが廣くおこなわれた。したがつて、河川文化諸國では奴隸にたいする關係は、捕虜奴隸をもふくめて、搾取の程度にかかわらず、より寛大であつた」(同右、二七四頁)。尤もこの慣習を利用して紀元前一五世紀頃のヌジの富裕な地主は自分を貧しい農民の養子にして財産、土地をまき上げたそうである(キエラ「粘土に書かれた歴史」板倉勝正譯、一七一頁以下)。

(4) 都市割據とおなじく、灌漑だけでも強力な中央政府による管理の必要なメソポタミアの最初からの宿命でもあつた。

債務奴隸、または眞の奴隸に異ならぬ狀態に人々が多く轉落することは共同體の種族的機構にとつて赤信號である。従つてウル第三王朝期に極限に達した眞の奴隸制に異ならぬ苛酷な直接的搾取形態が「個人的あるいは集團的な分地を要員に與える制度に代えられ」⁽¹⁾、「隸屬的賃借人にたいする土地附與の一層緩和された形態へとむかつた」⁽²⁾のは共同體の當然な淨瀉作用であつた。ハンムラビ法第二七條以下の規定する兵士への土地⁽³⁾《ekel, tirum》分與、その分割、賣買の禁止は古典古代社會の出發點であつたが、古代東方社會の集團的土地所有形態の下では變型に過ぎず、その土

臺を變えるものではなかつた。⁽⁴⁾ 同法の真意は征服種族セム人種アモリ族「アウエールム階級『awēlum』の債務奴隸」の轉落防止、支配の名目にすぎなくなつた氏族制による共同體の維持にあつて、逆に見れば共同體の一層の苦惱の反映であつた。エジプトでもおなじ理由でおなじ手段が採用されたが新王國の王權は全領土に行きとどいたのに對し⁽⁶⁾バビロニアでは土地賣買がよい慣行となつて行つた。⁽⁸⁾

(1) テュメネフ、前掲論文、二七八頁。

(2) 同右「ヘレニズム時代およびローマ時代における河川文化諸國」前掲譯、三一四頁、

(3) マルクス「諸形態」前掲譯、八頁。

(4) アジア的共同體では個人は偶發的存在にすぎないし、土地所有權を排除している（マルクス、同右、一一頁、「エンゲルスからマルクスへ」一八五三年六月六日附、六月書店版選集、八卷四六〇頁）。その故にテュメネフがハンムラビ法五三、五六條が自立的經營者（現地民）を念頭に置いた規定と解しているのは（『古代東方と古典古代』前掲譯二七九頁、二九二頁註⁽⁴⁾）行過ぎではない。他方、土地分與はコロヌス（*agkham*）——ハンムラビ法、三七、三八條——への經路を辿つた（テュメネフ、同右、二七八頁、二八四頁——エジプトの場合）。土地所有形態と共同體との關係については別論文で詳述することにした。

(5) アウエールム、ムシケウム（*muškennum*）、奴隸階級（*Waradum*）とさう法律上の三階級は實際と一致しない（早川、前掲書、二二五頁。Hdt. II. 164, Plat. Tim. 21A—エジプトの諸階級、職種）。ハンムラビ法によるこの規制はアウエールム階級すらも奴隸狀態に落ちた内部の搾取による混亂を示す。

(6) Hdt. II. 168. テュメネフ、前掲論文、二八三頁以下。

(7) プトレマイオス（王、運河の意）時代から國家的所有が後退、私的所有の要素が發展しても東方的デスポティズムは消滅せず、むしろギリシャ的影響に打ちかち、更にローマ皇帝權、キリスト教の支配に變身する——テュメネフ「ヘレニズム時代およびローマ時代における河川文化諸國」前掲譯、三一三頁注意。

(8) 戒能、前掲書、一五〇頁註二、cf. テュメネフ、前掲論文、三三二頁註60。

ハンムラビ法の焦慮するこの対策は手工業ならびに商業の異常な發達に對應するものであり、またそれによつてこの対策を餘儀なくされた。どちらにも、特に、手工業をリードする商業はその發達の契機を古代シュメール時代にもつてゐる。すなわち、南部メソポタミアの自給自足經濟の至難、抗爭の日常化は最初の商業形態―掠奪―商業の溫床であつた。⁽¹⁾どの時代でも商人《*tanakum*》は經濟的、また軍事的支配者と結託し、捐がなかつた。彼らはウル第三王朝期に直接的搾取形態が破綻を來し、土地附與の緩和された形態に向つた時に便乘して私的經濟活動を擴張して行つた。⁽²⁾これは當然に購入奴隸に依存する。⁽³⁾だが、會社組織《*gubdum*》まで規模を擴大し、後代には「空の星のよう」⁽⁴⁾に多くなつたバビロニアの商人も共同體機構を産業革命的に改革―「直接的生活維持手段の生産を目ざす家父長的奴隸制度が剩餘價値の生産を目ざすそれに轉化」⁽⁵⁾―せず、共同體の中央集權的機構と結託、またはそれに寄生し、王の方もそれに依存した。⁽⁶⁾私的經濟活動、私的奴隸制は農業にはさすがに侵入がおそかつたが、⁽⁷⁾手工業を發達させて共同體內をおびやかした。⁽⁸⁾共同體員は購入奴隸と競合させられて相變らず奴隸的狀態から解放されなかつた。その故に私的經濟活動の擴大に對應して生れたアジア的社會には異常な私法であるハンムラビ法もこれに對處して一夫多婦制を止揚、土地、財産の私有化傾向と共同體的機構との調節を企圖したけれど、土臺―總體的奴隸制―が灌溉組織の上に立つアジア的共同體の社會的構成の結果として變らなかつたから現實には家父長制が荒削りのまゝ殘され、⁽⁹⁾女司祭への法律的干涉として責任が女へ轉嫁された。その故にメソポタミアの王にはエジプトのメネス王、ギリシャのケクロポス王のような一夫一婦制を作つたという傳説の持主はいない。⁽¹⁰⁾残つてゐるのはアレキサンダー大王もあきれた、⁽¹¹⁾聖

書で周知の淫蕩な人種としてのバビロニア人であつた。⁽¹²⁾

- (1) マルクス「資本論」第三部第二分冊(9)、前掲譯、四七〇頁參照。
- (2) エジプトでも中王朝におなじことが起つた(テュメネフ「古代東方と古典古代」前掲譯二八三頁)。
- (3) テュメネフ、前掲論文、二七九頁。
- (4) 舊約、ナホム書、三の一六、エゼキセル書、一七の四。
- (5) マルクス「資本論」第三部第二分冊(9)、前掲譯、四七一頁。
- (6) 隊商《*haramu, siru*》の發達は王の侵略行爲、軍事力によつて擴大化された。サルゴン王がカッパドキア地方の隊商を援助するためブルシュハンダのヌルタガル王を攻撃したことは商業と掠奪とのくされ縁の典型であり、すべてのオリエントの帝國主義の手本となつた。また、バビロニアの商業文書が多く「シャマシュ神に誓約す」と結語しているのは古代東方社會の商業の限界、乃至は本質を示す。手工業の神としてエア神がアッシリア時代の終りまで君臨しているのは稼ぎは農民とおなじく剩餘生産物として神殿に納入すべしというアジア的專制主義の一具現である。神殿經濟時代が去つてからも神殿は共同體の集約的存在として政治、法廷、そして商業取引所として再生される。その故に王は占領地に神殿を建築(神殿經濟の適用)植民地化、總體的奴隸制に吸収)する(チャイルド「アジアの古代文明」下、前掲譯、一〇九頁)。そして神官は商業を通じて支配層たるを後代も失わなかつた(Meisner, Beiträge zum althabylonischen Privatrecht, S.819; Maspero, op. cit. p.750)
- (7) テュメネフ、前掲論文、二七九頁、二八四頁(エジプト)。
- (8) 農業と手工業との結合、未分化はアジアの共同體の存続條件である(マルクス「資本論」第一部第三分冊(3)前掲譯、五九三頁以下、「諸形態」前掲譯、九頁)。エジプトではこの原則が大體守られたようである(Diodorus Siculus, I, 74—マルクス「資本論」第一部第三分冊(3)前掲譯、五六九頁註2。また、ローマ時代でも奴隸の使用は依然少なかつた—テュメネフ「ヘレニズムおよびローマ時代における河川文化諸國」前掲譯、三〇八頁)。ウル第三王朝時代には注文による作業に限られていたメソポタミアの手工業は、ハンムラビ法では奴隸を自立させる可能性を與えるに至つたが、それでもその賃金は共同體の種族的

機構のよき維持者である農民以下に置かれている（第二七三、四條）。

(9) 古典古代的奴隸制上ではアジア的社會の荒削りの家父長制はやや緩和された形態を辿る（外面的に尊敬される女の地位と自由—エンゲルス「家族・私有財産」前掲譯、九〇頁）。マルクスが奴隸制なくば北アメリカも家父長制國家に變つていたであらうと述べているのは「哲學の貧困」大月書店版選集三卷、三七三頁）この意味で理解できる。中國では儒教よつてこの荒削りの仕上げが企圖された。

(10) cf. Westermarck, op. cit. p.9.

(11) Curtius, V.I.

(12) 舊約、外典バルク書、六の四三その他。

x

x

x

バビロニアの宗教的賣淫の慣習は商業（私的經濟活動と私的奴隸制）の發達にもかかわらず總體的奴隸制から古典古代的奴隸制へ不到達の、そして、それにより混亂《ベベル》を來し、水ぶくれになつた共同體機構における古きもの《母權制、または父權制への未知》と新しきもの《父權制、土地その他の私有》との和解、《馴れ合い》から生じた。フレイザーは、既に紹介したように、バビロニアのこの慣習を原始農業社會における大地母神への豐饒祈願として捧げる全男女による性的饗宴に求める。⁽¹⁾しかし、ニサンの日（第一の日）一日から始まる新年祭《akitu》——ラガシュではギルス町の主神ニンギルスの神殿からニナ町のバウ女神の神殿に贈物をもつてニンギルスが渡御せしめられ、バビロン市では逆に！女神イシュタールがマルドウク神の神殿に赴く儀式が行われ、その期間中は人々が階級の區別なく無禮講にふけることを許された——⁽²⁾がこの直系の遺風らしい。

(1) ウエスターマークは反對理由の一つとしてイシュタール女神は土地の豐饒、人間、動物の繁榮、増殖と無關係と主張する
シュメール・バビロニアにおける宗教的賣淫の慣習について

(op. cit. p. 211, 219)。しかし、その先身アスタルテが大地母神であつたことは既に紹介した通りである(なお、松村武雄「古代希臘に於ける宗教的葛藤」九四二頁、同上「希臘神話の新検討」一五一頁参照)。

(2) フレイザーはこの祭禮をサツルナリアとして知られる種まきと農耕の神サツルナへのローマ人の祭禮、更に今日の南歐のカニヴァルへと連結する (Golden Bough, I. The Magic Art and the Evolution of Kings, vol. II. pp. 310 sq.; VI. Scapegoat, pp. 306 sq.) なお、エジプトの新年祭—トートの月(第一の月)一日は(アレクサンドリア暦)八月二十九日) ナイルの氾濫の始まり、天狼星の出現(既述)と一致した (Frazer op. cit. IV. Adonis Attis Osiris, vol. II. p. 36)。⁽¹⁾ バビロニアの新年祭はこれほどの農業との緊密性は失われているようだ (cf. M. Jastrow, Religion Babylonians und Assyrians, II. S. 462)。尤も既述のように王權の合法化のため王は毎年この祭禮を缺かせなかつた。それでもこの祭禮に使う祈禱書「神々の戦争」(ガスター、前掲譯、七一頁以下)を一讀するとマルドウク神讃歌⁽²⁾王權誇示を通してその形式的性格が強く感ぜられる。

更にフレイザーによれば、バビロニア以外に多くみられる女司祭だけが行うその慣習も同一起源のものであるが、⁽¹⁾ また、嘗ての性的饗宴は單婚の發達によつて不自然となり、身體の代りに毛髮などを神殿に捧げる行爲で代替され、他方、共同體の古い傳統を守り、共同體の安寧を祈願するため一部の女が代表して生涯、またはある期間神殿に奉仕⁽²⁾ 性的に⁽³⁾ するようになったとも述べる。この起源論によれば全女性による宗教的賣淫の行われたメソポタミアは貴族の女しか行わなくなっているエジプトより古い共同體から遠く離れていないことにもなるのであろうか。フレイザーの起源論⁽⁴⁾ 古代人への思いやり⁽⁵⁾ はこれ以上説明して呉れない。だが、疑いもなく明瞭なことにバビロニアでは神の女であることは經濟的にも保證された。商業文書にも女司祭が債權者になつているのが多い。特にシャマシュ神殿の女司祭はまつたくの金貸業者として知られている。⁽³⁾ 確かにバビロニアでは女司祭が多かつた。ハンムラビ法第一一〇條は神殿に居るべき高級女司祭で酒屋を開業したり、また酒場に出入する者は燒き殺すと規定して取締りに躍起と

なつてゐる。⁽⁴⁾ 他方、娘をもつ親は結婚か女司祭のどちらでも選擇できた。ハンムラビ法も、妻となる女も女司祭志願の女もおなじく兄弟達と財産を分與して貰うことができ(一八〇—二條)⁽⁵⁾、ある場合には持參金(seriquum)⁽⁶⁾とおなじくそれを(商業資金として?)神殿に持參できると默認している(一八三、四條)。こういう規定はアウェールム階級すら債務奴隸化の危険が多かつたことによる《法律的》結婚の困難の反映でもあつたかも知れない。ともあれ、洪水からの避難所でもあつた神殿は女達にとつては商業的専制主義からのそれにもなつたらしい。

(1) op. cit. IV. vol.I. pp.71.

(2) Ibid., p.40 sq.

(3) Himprecht, *Cun. Text* (Univ. Pennsylvania) vol. VI, I. p.25. だがこの編者は、その故に當時の男女は同權であつたと錯覺を起して *sq.* (Ibid., p.18)。

(4) 井上「バビロン法の神婦と其社會的起源」前掲誌、一三三、一九八頁參照。

(5) 兄弟と同額の場合(一八〇條—高級女司祭(ナディートム)、下級女司祭(チクルム—去勢された男女?^{カトシタナ})、^{兄弟の三分の一の場合}形文字法の研究」同條譯註 G.R. Driver and J.C. Miles, *The Babylonian Law*. 1952, vol.I. p.368) 兄弟の三分の一の場合(一八一、二條)。一應の均分主義はまだ私有財産を知らぬ共同體の名残り、父權制の初期様相であるが、現實には被相続人は分割方法が自由であり、一子相續に近い現象が慣行であつたと思われる(cf. ハンムラビ法、一六五條—自由遺言と長子への不動産遺贈。また、戒能、前掲書、一三八頁註三)。婚姻の民事契約的性格(エジプトに顯著—戒能、同上、九五頁以下、Briffault, op. cit. vol.I. pp.382 sq.)も共同體的名残りであり、私有財産制確立のための男の苦勞の現われでもあつた(ハンムラビ法、一二八條)。バビロニアでは妻が奴隸にあらざることの證明にすりかえられてゐる(Maspero, op. cit. p.735; 戒能、同上、一三二頁)。

(6) 嫁資には夫も自由に手がつけられず、不當な離婚には返還を要した(ハンムラビ法、一三八、九條)のは、また、父權制シュメール・バビロニアにおける宗教的賣淫の慣習について

不確立の故でもあつたが、家長同志間の賣買婚の故でもあつた(2) 井上「シュメール及びバビロン法に於ける婚姻」法學研究、十八卷三號、一三〇頁—賣買婚否定、戒能、同右、一二三頁、原田同右、一九八頁以下)。

シュメール法では女司祭は幾種別にも分けられていないが、既に娼婦的に扱われている。ある條文(Lun 收録、一五條)は子のない男が路上(神殿の廣場?)の女司祭に子を生ませたときは穀物、油、羊毛を對價に子を相續人として引取り得ると規定している。⁽¹⁾役人、神官らに限られたであろうが、シュメール人は二人の妻をもつことを認められていたから(前述十二、三條)女司祭は第二の妻とならぶ妾といえる。⁽²⁾他方、女奴隷に子を生せたときは財貨を與えないが母子に自由を與えたと規定している(一三條)。後代にこの女司祭(Kalil)がハレムの意味をもつ素地は既にギムとの競合の中でこの時代に作られている。直接的搾取形態、農業の安定度の相異でエジプトでは性的饗宴は淘汰されて(自然的にも)されて、⁽³⁾既述のように一部の貴族の女が宗教的賣淫を執行!している他には、女尊長(母權制農業社會の宗教的支配者)⁽⁴⁾はテーベのアモン神の神殿に神の配偶者として選ばれた一人の高貴の出身とされる女、農業とは關係が稀薄になつて仕舞つた神託とやらを告げる靈的の巫女に變化(格下げ)している。⁽⁵⁾尤もこれはバビロニアでも最高位の女司祭(«*enun, ninan*»として存在しており、バビロンの聖塔の頂の入室にある黄金の寢臺とそこに横臥して神託を受ける一人の女のことはやはりヘロドトスによつて人口に膾炙している。⁽⁶⁾)

- (1) 路上から得るのは妻の場合もおなじである(dag 收録、第六、七條。井上、前掲論文、一一七頁以下がこれを掠奪婚にあらず(路上から正當に)と解されるのは近代的道徳觀を押しつけすぎるように思われる(c: 原田、前掲書、二〇二頁)。
- (2) 原田、前掲書が情婦と譯され、ヒエロドロースの意味がないとされるのはまた、近代のすぎる解釋に思われる。

(3) エンゲルス「家族・私有財産」前掲譯、六二二頁。

(4) Briffault, op. cit. p.2-4, pp.21 sq. (女王の魔術師的起源) それは女の天性的な靈的能力の故でなく (cf. 野口隆「古代社會と思维」九一、一五三頁等) 農業經濟と結合して生れたものであつた (洞、前掲書、三二三頁)。

(5) Hdt. I.182 古代ローマにおける母系相續 (Frazer, op. cit. I. vol.II. pp.226 sq., 266 sq.) ラガシユ 古王朝のウル・ニナ 王の娘の宗教的重要な地位 (L.W. King, A History of Sumner and Akkad, 1923, p.171. N.1, p.116) エジプトの王家に顯著な兄弟姉妹婚などこの系統から。

(6) Hdt. I.181; Frazer, op. cit. I. vol. II. pp.129 sq.

ハンムラビ法がエントゥムの他に高級女司祭《naditum》、デクルム《zikrum》、ゼルマシートゥム《zermastum》、シュギートゥム《sugitum》(中、下級女司祭)、および最下級女司祭《qadisum》という區別をつけているのは女司祭の氾濫と女の隷屬化の現われであるに相違ない。エントゥムは王の娘が就任できた。エジプトの場合とおなじく彼女は人間とは性交しないことになっているが、⁽¹⁾もし人がエントゥム、人妻《dam》指さして中傷したならば、それが事實無根の虚言であれば裁判官の面前に引き立てゝ額に(奴隷の)印をつけるといふ別規定(ハンムラビ法一二七條)によればこの高位の女司祭も大分醜聞があつたらしい。テーベのアモン神殿の女司祭はいみじくもアモンのハレムの女主長とも呼ばれた。⁽³⁾他の女司祭の有資格はアムエールム階級の女に法律上は限られている。他の女はクワディシュトウムとして大雜把に取扱われたのであろうか。彼女達の下は女奴隷《amar, amatum》である。妻は一人に定められているけれど女司祭、女奴隷によつて第二の妻、妾が補充されているからシュメール時代の一夫多婦制は結局實質的には克服されてゐた。⁽⁴⁾

(1) 他の讀方は井上「バビロン法の神婦と其社會的起源」前掲誌、一二四頁。

(2) Hdt. I.182.

(3) Maspero, op. cit. p.52. 他方、王が娘を女司祭にすることはメソポタミアでも重要な共同體の傳統であつた(ウーリー「ウル」前掲譯、一一四、一九七頁參照)。

(4) エジプトでも一夫多婦制は緩慢ながら形成されて行つた (E. Revillaut, L'ancienne Egypte, 1909, 2. p.31, 39, 57. トマン、前掲譯、一五一頁。cf. Hdt. II.92—一夫一婦制)。

エントウムはそれとらば高位の女司祭であるナディートウムと共に外面上は子を生めないことになつてゐるので、⁽¹⁾われわれはサルゴン王はイシュタル女神に仕える女司祭が未知の男によつて懷妊し、そして生れた子であつたが、女司祭は子を生むことは神により許されていないので葦の舟に入れて涙と共に河へ流した……というような傳説に目にかゝる。ナディートウムに代つて子を生むシュギートウム(第一三七、一四四條)はシュメール法のカルリルに相當する待遇を受けたらしい。彼女は妻とおなじく分與された父の財産を持參金として利用できると規定してゐる(第一八三、四條)。彼女にバビロニアの女の宿命が最もよく示されてゐるようである。神⁽³⁾共同體の女にして且つ賣春婦!

(1) ハンムラビ法第一三七、一四四條(ナディートウムを生を止めず)、一四四、五條(ただし結婚は可能)。エントウムにはこのような規定はないが(たゞし兄弟と同額に父の財産を分與して貰えた——一七九條以下)同様に解してよいであらう(Driver and Miles, op. cit. p.363)。なお、ナディートウムにはまた種別があつた(一八一、一二)條。第一八〇條のそれは王の娘か? また、ゼルマシートウムも子を止めないことになつてゐる(Ibid. p.371)。他方エントウムおよびナディートウムは始源的には古代ローマにおける母系相續の仲介的存在であつたヴェスタ處女と同一のものとして扱えられる (Frazer, op. cit. I. vol.II.

pp.227sq.)

(2) 井上、前掲論文、一六〇頁參照。

(3) ただし、フレイザーもウェスタマールもこれを男の司祭と解する (Frazer, op. cit. IV, vol. I, p.72, Westermarck, op. cit. p.224)。他にデクルムを去勢された男女と解する説 (原田、前掲書、一七八條譯註)、兩者共女司祭とする説 (井上、前掲論文、一六六頁以下)。

クワディシウトウムはアッシリア法第四〇條の「娼婦」(kadim)に言語學的にも連結するが、その故に彼女をヘロドトスのいう宗教的賣淫に適用することは狭量な解釋となろう。⁽¹⁾高位の女司祭も母權制時代、または父權制も私有財産制も知られなかつた時代から轉落しているし、バビロニアの女はすべて女司祭—賣春婦になることを餘儀なくされた、さもなければ女奴隷であつたが、この女奴隷も解放によつて女司祭に昇格させられた。⁽²⁾ヘロドトスの記事の對する直接の證據は確かに見當らない。⁽³⁾だが、娼婦になる女が増えたこと、および女司祭が實質的に娼婦に多く轉落したことは確かであつて、ヘロドトスの記事は誇張ではなかつた。ヘロドトスのやはりセンセシヨナルな記事の一つであるバビロニアの處女市も、彼自身も認めているようにこの賣淫制の中に解消して仕舞つている。⁽⁴⁾リチアでは、彼は明確に述べる。「庶民階級の娘は一人残らず、婚期まで、自分の腕で自分の嫁資を蓄積するために醜業を營む」⁽⁵⁾と。

(1) cf. Driver and Miles, op. cit. p.369, 井上、前掲論文、一七五頁。

(2) 小栗、前掲書、三三〇頁。アウエールム階級の子を生んだ女奴隷はシユメール法とおなじく自由解放された (ハンムラビ法、一七〇、一條。cf. 一一七、二八〇條アウエールム階級の奴隷化防止)。

(3) その故に井上、前掲論文 (一一七、一九八頁) はヘロドトスの記事を否定されるが、近代的道德觀を押しつけすぎたと残念に思われる。

(4) 彼によればこれは貧乏人が持參金つきの不美人と結婚できるから合理的で秀れた結婚方法だそうだが、今は廢れて、彼女らが他へ連れて行かれたり、不當な目に會わぬようにするため別の制度によつて代えられた。―すなわち、「彼らは征服されてから、虐待され零落したので、庶民階級はすべて生活に窮して娘に醜業を營ませた」(I. 196)「宗教的賣淫! この處女と宗教的賣淫との關係については Frazer, op. cit. IV. vol. I. p.58; Westermarck, op. cit. p.214 が言及しているが本稿に重要でないので省略する。ここでは、宗教的賣淫は處女、非處女を問はず本物の賣淫として取扱うだけで充分であり、外人は神の使つと見做されたかも知れないが (Briffault, op. cit. p.221) それは宗教的賣淫が本物の賣淫になつてから増えたという面の認識だけで充分である。

(5) Hdt. I. 93, Briffault, op. cit. p.223, N.6. パ波斯では宗教的賣淫はキニエロス王によつて擴大され、公認されて王女も庶民の女も行わせられた (Frazer, op. cit. IV. vol. I. p.41)。なお、ハンムラビ法第一二九條によれば姦通がいけないことになつてゐるが、その觀念は奴隸所有の味を知つた者だけがその意識の上で始めて作り上げたモラルであつた (戒能、前掲書、一〇三頁参照)。そのくせ、自分は勝手に手切金を拂つて離婚できたし (一二八、九條)、女奴隸や女司祭に手をつけた。第一四四條によれば女司祭と女奴隸を同時に娶れないことになつてゐるが、かういふ規定のあるところを見るとそれを犯す不心得者は少くなかつたらしい。ある結婚契約書によれば、水中に投げこまれるよりましであつたかも知れないが (シュメール法、ana itišu より) (五條、ハンムラビ法、一二九、一四三條)、夫に逆いた妻は奴隸に賣却できた (E. Chiera, Old Babylonian Contract, Univ. Pennsylvania, vol. VIII. No.2, p.127)。他方、要領よく奴隸は一般なみに世襲財産をもつことができた (小栗、前掲書、三〇三頁)。

このようなバビロニアの女達の宗教的に粉飾された行爲はもはや大地母神への敬虔といえるものでなく神への冒瀆であり、實質的に賣淫に他ならなかつたが、古代東方社會ではどこでも原始共同體から遠く離れていない結果このように神殿《共同體の集約的存在》から賣淫制が発生している。そして、彼女らが史上最初の淫賣婦といえるものであり、女の娼婦的本能もこゝから人爲的に作られ、從順、嫉妬等の女的美徳、惡徳とやらもまたこゝから生れて行つた。⁽¹⁾⁽²⁾

バビロニアの宗教的賣淫の慣習のスケールの大規模は商業の異常な、そして、急激な發達による奴隸制の、擴大化、本物化に比例している。つまり商業による神殿の世俗的利用の擴大《私的奴隸の増加、本物の奴隸制》古典古代的奴隸制への接近》によつて神殿はまた女郎屋になつて行つた。それでも神《共同體》は無用にはならなかつた。「原始共同社會の生命力は、セム人、ギリシヤ人、ローマ人などの社會のそれよりも、まして近代資本主義社會のそれよりも、比較にならないほどながい」。(3) 古代東方社會の專制君主^{デスゴット}の最後の仕事は共同體の神をいかに私神化するかということであつた。法の神シャマシュは太陽神として全人間、そして動物にも慈愛をそそぎ、不正を罰する神として知られている。(4) 女の安産、ひとり旅の加護もこの神に祈願された。(5) だが、他方、ハンムラビ王自身「バビロニアの太陽」とこの神を偕稱している。(6) 後代に聖塔はできるだけ高く作られて行つた。こうして神と民衆を分離することは共同體の代表としての王の資格と奴隸制社會の代表者という新要素を合理化するためであつたけれど、また、それは支配者の威嚴を示することにより共同體の人心を掌握しようとする焦慮、腐心の結果でもあつて、共同體の混亂《ベベル》がひどくなるにつれて聖塔も益々高くなつて行つた。その擧句は神と人間と動物との奇妙な混合、有翼人首像、人首獅子體の巨像であり、醜惡なものとしての宗教的賣淫であつた。リデアではそれは紀元二世紀頃まで續いたという。(9) また、シリアのヘリオポリスではコンスタンチヌス帝によつて神殿はこわされ、その慣習は廢止されて跡に教會が建てられたという。(10) だが、バビロニアの宗教的賣淫制はアッシリアにおいて完成(職業的賣淫制)した。すなわち、ヴェールを被ることによる一般の女と女司祭、娼婦との區別である。このヴェールはその東洋的家父長制社會における貞節の印であり、また女同志の間における唯一の特權、虚榮であつた。(11) ギリシヤでは、バビロニアの宗教的賣淫を醜惡なものと呼

笑するヘロドトスも認めたようにキュプロス島のパボスのアフロディテ女神の神殿にこの慣習が残存していたがギリシヤ本土においては美の女神として周知のように優麗化されている。それは父權制的なゼウスを主長とするオリュンポスの神々の園の土臺―古典古代的奴隸制と並存するものとしての一夫一婦制社會の餘暇⁽¹³⁾ (σχολῆ school, scholastic)の中で仕上げられた。

- (1) エンゲルス「家族・私有財産」前掲譯、八七頁。
- (2) その故に、愛人タムムズを追慕して彼を地獄にまで訪ねて行つたイシュタル女神は、番人に「第一の門では冠を、第二の門では耳環を、第三の門では首飾り第四の門では………そして、第七の門では衣服をとられ、まつたく裸にされました………」(イシュタル女神下界降り) というような好色的な傳説がメソポタミアから創られて行つた《舊約の好色性の下地》。
- (3) シュメールの神殿經濟の時代に神殿はそれ自體大銀行、大金持であつた(チャイルド「文明の起源」下、前掲譯、七八頁。後代の商業はこの繼受にすぎない。
- (4) そして、これを知らないメインは英國のインドにおける共同體破壊事業の協力者であつた(マルクス「ヴェラ・ザスリツチへの手紙」大月書店版選集、一三卷一八九頁)！
- (5) Meissner, Babylonien und Assyrien, 1920-25, I, S.148, II, S. 20, 167.
- (6) Meissner, aa.O. I, S.390, II, S.20
- (7) Meissner, aa.O. I, S. 47. シヤマシュはイシュタルの兄とされている！ また王の都合のよい武運、國家の安寧祈願の託宣の神として引き出される。
- (8) 戒能、前掲書、一四六頁。
- (9) シヤマシュはまた惡鬼拂ひの神としても引き出される(Frazer, The Worship of Nature, pp.548 sq.)。灌漑の上に發達する天文學のような科學も呪術の中に埋没、ギリシヤ人にその進歩と應用を委ねる。フレイザーが專制主義の故にバビロニ

ア、エジプト、そして近代日本などに文化と科學が發達したと述べてゐるのは (Golden Bough, I. vol. I. p.218) 絶望的な見方であろう (註チャイルド「文明の起源」下、前掲譯、一一九頁以下、特に一九七—九頁)。

- (10) Frazer, op. cit. IV. vol.I. p.38.
- (11) Eusebius, Vita Constanti, III. 58; Socrates, Historia Ecclesiastica. I.18. 7-9; Sozomenus, Historia Ecclesiastica, V.10.7
- (12) Driver and Miles, The Assyrian Law, 1935, pp.126 sq.
- (13) Hdt. I. 199; 松村武雄「希臘神話の新検討」一八二頁以下參照。
- (14) エンゲルス「家族・私有財産」前掲譯、八二頁。